



SPECIAL FRONT INTERVIEW

オムニバス映画『ウタモノガタリ—CINEMA FIGHTERS project—』

岩田剛典×石井裕也 山下健二郎×岸本司

(三代目 J Soul Brothers from EXILE TRIBE)

(三代目 J Soul Brothers from EXILE TRIBE)

SPECIAL COLUMN EXILE TETSUYA

JAPAN MOVE UP WEST

日本を元気にする為に!

54
JAPAN MOVE UP WEST

JAPAN MOVE UP WEST

自分の住む“まち”に夢、憧れ、成長を。

『JAPAN MOVE UP WEST』は子供たちに「夢」を、若者に「憧れ」を、社会人に更なる「成長」を与え続ける…
それが企業を、まちを、発展させ岡山から中四国へ、そして日本を元気にしていく事だと確信します。

JAPAN MOVE UP WEST 実行委員会 加盟企業一覧 (2018年6月11日現在)

株式会社 祥 株式会社 DMM.com アシード株式会社

special partner **コカ・コーラ ボトラーズジャパン株式会社** **イオンモール岡山**

JAPAN MOVE UP WEST 賛同企業加盟・その他お問い合わせは右記まで JAPAN MOVE UP WEST 実行委員会運営事務局 (株式会社 HEADLINE WEST / TEL:086-250-8089)

JAPAN MOVE UP WEST

●発行人/源 真典(株式会社 HEADLINE WEST) 一木 広治(株式会社ヘッドライン)
●発行所/株式会社 HEADLINE WEST 〒700-0925 岡山県岡山市北区大元上町12-14 Leeビルディング1F TEL:086-250-8089

隔月刊【ジャパムーブアップウエスト】2018年6月11日発行 vol.32 J u n e

※本誌の売買・交換(金品を代価とする譲渡)一切禁止。本誌または掲載内容のすべての著作権は発行元に準ずる。

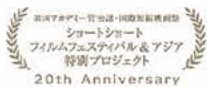
**HEADLINE
WEST**

6つの詩から生まれた 6つのショートフィルム

6 tears... 言葉たちが泣いている。



ウタモノガタリ CINEMA FIGHTERS project



ショートショートフィルムフェスティバル & アジアにてプレミア上映後

2018.6.22 Fri 全国ロードショー!

EXILE HIRO / 主演・石井裕也 / コーディネーター・小竹正人 / 配給・LDH PICTURES / ©2018 CINEMA FIGHTERS



ウタモノガタリ

-CINEMA FIGHTERS project-

EXILE HIROと、俳優の別所哲也が代表を務める

国際短編映画祭『ショートショートフィルムフェスティバル & アジア (SSFF & ASIA)』のコラボ企画第2弾!

EXILE TRIBEの印象的な楽曲の数々を生み出してきた作詞家・小竹正人の詩の世界を、気鋭監督たちが映像化するプロジェクト。

6つの詩から生まれた6つの新曲を6つのショートフィルムに仕上げた、オムニバス映画『ウタモノガタリ-CINEMA FIGHTERS project-』から

『ファンキー』の監督・石井裕也×主演・岩田剛典、『幻光の果て』の監督・岸本司×主演・山下健二郎のタッグを直撃!

撮影・仲西マティアス 文・秋吉和由子 ヘアメイク (岩田剛典、山下健二郎)・下川真矢

主演 岩田 剛典 × 監督 石井 裕也

タッグを組むと決まったときからお互いにワクワクしていたという監督・石井裕也と主演・岩田剛典の2人。

岩田剛典(以下:岩):僕は以前から監督の作品を拝見させていただいていたので今回すごく楽しみでした。監督はテーマ楽曲の『東京』をご自分なりにどう解釈したかを脚本とは別に、文章に記して送ってきてくださったんです。それを読ませていただいて、すごく頼もしい方だなという印象を抱きました。

石井裕也監督(以下:石):僕も岩田さんと作品を作ることができるなんて本当に楽しみでした。やっぱり岩田さんって、すごく人気者なので実際はどんな人なのか興味があったんですね(笑) どんな人物なのか、俳優としてどう出てくるだろうとか。実は、岩田さんと『植物図鑑』で共演した高畑充希さんに“どんな人?”と聞いたりもしました。

岩:何とおっしゃっていました?

石:ちょっと変わった王子様、と言ってました(笑)でも本当に素敵な方だと思います、と。

岩:ははは(笑)

石:それですますます楽しみになって、せっかく岩田さんとショートフィルムを作るなら、印象に残る作品を作ろう、と。岩田さんに合う役かどうかは分かりませんでしたけど、これまでとは全く違う岩田さんを見せられるという自信はありましたよ。

岩:監督のお手紙にも“とにかく自信がある。俺はやるよ”と書かれていて。それはこちらも気合入りますよね(笑)

物語の舞台は2041年。謎のファンキー集団と、岩田演じるそのリーダー“純司の兄貴”が、30年前に亡くなった純司の母親をめぐる繰り広げるエピソードがポップにつづられる。短期間の撮影は、なかなか過酷だったもよう。

岩:短期間とはいえ、本当に刺激的な経験をさせていただきました。僕はまだそれほど出演させていただいた作品数は多くないですけど、中でもこれまで演じたことのないような経験ばかりでした(笑) あれほど大量の水を使った撮影もこれが初めてでしたし。部屋に水が入ってくるという場面も初めてでした。

石:あまり無いよね(笑)

岩:無いですよ。トリック的というか、本当に面白いと思いました。でも大変だったんですね、あの場面。部屋を水でいっぱいにするはずが、どこからか水が漏れだしたりして(笑) 共演の池松壮亮さんたちとも、長編ほどコミュニケーションをとる時間は無かったにもかかわらず、すさまじい時間を共に戦い抜いたという充実感がありました(笑)

石:ははは(笑) 時間的にもハードななか、毎日水を使う撮影があったしね。池松さんたちにはパスの上にも乗ってもらったり…。いろいろと大変な状況を、キャスト全員が一つのチームとなって頑張ってくれました。

岩:皆さんと息を共有できてよかったです。

完成した今、質問してみたいことは?

岩:そうですね…劇中で、仲間の一人が純司に『俺を殴れ』と言われて、殴ってはキスをするという、不

思議なやり取りがあるんですけど…あれは一体、何だったんだろうって(笑)

石:あれね(笑) 何というか、独特なチーム感を見せたかったんです。はたから見たら全然、意味分らないじゃないですか。

岩:分からないですね(笑)

石:おまけに、さんざん殴らせた後に、ありがとな、とかかなり変な人ですよ、岩田さんも現場で言ってたけど(笑) まあでも、外の人たちから見ただけとしても、その人たちの中で成立していればいいじゃないか、と思うんです。それがチームというものなんじゃないか、と。だいたい彼ら、誰に迷惑かけているわけじゃないしね。

岩:確かに(笑) なるほど、そういうことだったんですね。

石:僕が岩田さんに聞きたいこと…というか、今回一緒に作品をやらせてもらって、岩田さんのことをもっと知りたいと思ったんです。もともと、常に殻をぶち破って進んでいくのが好きな人なんだと勝手に想像していましたが、実際その通りでした。だったら、また一緒に何かをぶち破ってみたいな、と。だからまた、それこそ長編とかも一緒にできたらなと思います。

岩:監督と長編もやってみたいですね。また違う作品になるとしますし。とくに今回の作品は世界観もぶっ飛んでいるので、監督の中でも特別な一面を見せてくださった作品なのじゃないかなと思いますし、今度は長編でガッツリ組ませていただけたら、うれしいですね。

幻光の果て

監督 岸本司 × 主演 山下健二郎

釣りを趣味とし海も大好きな山下健二郎と、沖縄を拠点に映画製作を続ける岸本司監督。2人が生み出したのは、沖縄ロケで挑んだ海に生きる男の物語『幻光の果て』。

岸本司監督(以下:岸):僕の中で山下さんの印象という『HiGH&LOW』のコメディ風なキャラクターが浮かんだんですが、今回は楽曲の『Baby Shine』の歌詞から、山下さんの一直線の部分、飄々としているながらも力強さを内に秘めている。そんなところを描きたいと思いました。そんな強さが物語の後半では、到底、他の人は受け入れられないところまで行ってしまふ、そんな人物を表現してもらいたくて、完全に山下さんに演じてもらうことを念頭にあって書きで脚本を書きました。

山下健二郎(以下:山下):うれしいです。監督は、これまでも沖縄を舞台に作品を作られていて、撮影に臨む前に過去の作品も拝見させていただいたんですが、本当に映像美が素晴らしくて。僕もアーティストとして映像美にも引かれましたし、アウトドア好きとしてはロケ地の魅力の伝え方も素敵だなと思いました。僕ら役者の話をしっかり聞いてくださったことも、大変助けられましたね。今回、事前に監督と密にお話する時間がなく、頂いた脚本を読んで自分なりに役を作って現地に入ったのですが、撮影前夜に監督が、共演の加藤雅也さん、中村映里子さんを含めしっかり話す時間を作ってくださいました。最初に気持ちを一つにして撮影に臨むことができたのは、僕の中で非常に大きかったです。

岸:山下さんがアーティストとして才能ある方ということは分かっていましたが、役者としても素晴らしくて、現場ではほとんどお任せしてしまいました(笑) 彼がこの役を演じれば大丈夫だと最初から思っていました。実際、かなり大変な撮影も多かったんですが、そういうことも嫌な顔一つせず、むしろ飄々とやっつけてのけてしまふんです。

山:楽しかったです(笑)

ところが実際は、かなりハードな水中撮影もこなしていたとか。

山:海が舞台なので、水に飛び込んだり水中のショットを撮るといふ話は何って、水に入るのは抵抗ないし大丈夫ですとお返事していたんですが、いざ沖縄ロケで、撮影に入って3日目かな? 5メートルのプールに飛びこんで、一番深いところまで潜ってもらいます、って(笑) できませんと言う前に、まずはやってみようと思い、ダイバーの方から酸素ポンベの使い方をレクチャーしていただいて、耳抜きしながら深さに慣れていって下まで潜りました。最初は少し恐怖心もありましたけど実際潜ってみると、こういう経験もなかなかできないなと思ひまして。ポジティブにとらえて楽しもうと思ひてやったら意外とすんなりできました(笑)

岸:本当に申し訳ない(笑) 自分で言うのもなんですけれど、山下さんのおかげで、映像に本当の力が出たと思っています。これまで作ってきた作品と強度が違うものを生み出すことができました。

山下の主役としての頼もしさにも助けられたと監督。

岸:最終日、時間が迫っていて役者さんもスタッフも皆、追い詰められていたんですが、そのとき山下さんが“大丈夫、落ち着いて行こう”と声をかけてくれたんです。現場の空気感が一瞬で落ち着きました(笑) 主役として周りのこともしっかり見てくれた。機会をもらえるなら、山下さんとぜひまた一緒にやらせていただきたいですね。今度はまったく違うキャラクターを演じてほしいですし。

山:いいですね、ぜひまた沖縄で(笑) いろいろな仕事をいただく中でも、今回は短い時間ながら100%気持ちよくやらせていただきましたし、自分としても成長させていただいた気がしています。撮影の合間にスタッフの方に沖縄の話を伺うのも楽しかったですし、日本の各地で、こうしてすごい熱量を持って作品作りをしている方々と仕事できたということも自分の財産になりました。

岸:じゃあ次はコメディーなんてどうですか(笑)

山:いいですね、僕もコメディー好きなんです。また漁師でもいいですけど(笑)

岸:山下さんなら、また違う漁師役ができるでしょうしね(笑) どんな役でも山下さんの芝居で作品を豊かにしてくれるはずですよ。

SPECIAL FRONT INTERVIEW

オムニバス映画『ウタモノガタリ—CINEMA FIGHTERS project—』

『幻光の果て』 監督・脚本:岸本司 出演:山下健二郎、中村映里子、大城優紀、加藤雅也 楽曲「Baby Shine」(DEEP)

『ウタモノガタリ - CINEMA FIGHTERS project -』に
 三代目 J Soul Brothers も含めた
 アーティスト達が新曲を提供！

主題歌として新曲 6 曲！

『カナリア』	EXILE TAKAHIRO 「Canaria」
『ファンキー』	三代目 J Soul Brothers from EXILE TRIBE 「東京」
『アイオウ』	GENERATIONS from EXILE TRIBE 「何もかもがせつない」
『Kuu』	DANCE EARTH PARTY 「あの子のトランク」
『Our Birthday』	JAY'ED & 鷺尾伶菜 「How about your love?」
『幻光の果て』	DEEP 「Baby Shine」



『ウタモノガタリ -CINEMA FIGHTERS project-』

6つの詩から生まれた6つの新曲、その世界観を気鋭の監督6名がショートフィルムとして映像化。『トイレのピエタ』で第56回日本映画監督協会新人賞を受賞した松永大司監督作『カナリア』に TAKAHIRO。『舟を編む』で第37回日本アカデミー賞最優秀作品賞最優秀監督賞を受賞した石井裕也監督作『ファンキー』に岩田剛典。『0.5ミリ』で第39回報知映画賞作品賞を受賞した安藤桃子監督作『アイオウ』に白濱亜嵐。『663114』がベルリン国際映画祭でSpecial Mentionを受賞した平林勇監督作『Kuu』に石井杏奈、山口乃々華、坂東希。SSFF & ASIA で4度「観客賞」を受賞している Yuki Saito 監督作『Our Birthday』に青柳翔。映画『ころも、おどる』で SSFF & ASIA 2015「ジャパン部門」にて優秀賞を受賞した岸本司監督作『幻光の果て』に山下健二郎。さらに、映画界を代表する俳優たちが結集。

EXILE HIROとSSFF & ASIA代表を務める俳優の別所哲也、そして、EXILEや三代目 J Soul Brothersなどに歌詞を提供してきた作詞家・小竹正人のコラボレーションが生んだ、注目のプロジェクト〈CINEMA FIGHTERS project〉の最新作!

時間:1時間37分 配給:LDH PICTURES 6月22日(金)より全国公開 ©2018 CINEMA FIGHTERS

DANCEの道 『from EXILE』

ゴールデンウィークも終わり、少しずつ雨の季節を近くに感じてきましたね。季節の変わり目は、体調を崩しやすいので、気をつけてください!! なんて言ってる自分が先日、風邪をひいてしまいました(笑)。大したことはなく、よく寝たらすぐに治りましたが、皆さんもぜひお気をつけください。

さて、2018年度も淑徳大学の客員教授が始まり今年で5年目となりました。毎年の楽しみでもあります。どんな講義内容にして、この講義を選択してくれた学生さんたちに、今の自分が何を伝えれば良いのか、始まる前は本当に毎回緊張します…。

1回目の座学講義は、毎年恒例の「あなたの夢はなんですか?」の時間で、学生さんたちの今の夢を色紙に書いて発表してもらったり、僕が昨年度、大学院を卒業させていた時に書いたダンスの論文の紹介などをして、僕の夢を語って聞いてもらったり、論文をベースにダンス講義をやらせてもらったりと、少しずつですが、大学院で勉強した事を形にするチャレンジもさせていただいております。

実は今年の学生さんの中に、2013年の「日本を踊る～DANCE EARTH JAPAN～」の旅で、高知県のよさこい祭りに行った時「僕とUSAさんと一緒によさこいを踊りました!」と話しかけてくれた学生がいたのですが、あの時一緒に踊った記憶を今でも覚えていてくれて、今は自分の夢を叶えるために大学で頑張っていて、またDANCEや夢を通じて再会できたことは、本当にうれしい出来事でした。

チャレンジが、さらに高いチャレンジを与

えてくれて、それを乗り越えた時の景色が格別だという事を、今回の5年目の講義でも学生の皆さんと一緒に見られるように頑張りたいと思います。

そして毎年このチャレンジに、温かいお言葉や、応援をしてくださる皆さんに、いつも背中を押していただいて、感謝しております。

そんな感謝の気持ちを、やはりDANCEや音楽や、そしてステージで皆さんにお返ししたいのですが…。

先日、いよいよEXILEとしての撮影をしました!!

詳細はまだ言えませんが、ヤバい!ヤバい!ヤバい!!ヤバい↑↑↑カッコいい映像になりそうです!!

EXILEメンバー全員揃っての撮影は、久しぶりだったのですが、やはり身も心も引き締まると思います。気がみなぎるといいますか、いよいよだなあってワクワクしました!!ぜひ!ぜひ!これから発表されるアルバム、そして秋から始まるドームツアーを楽しみにしていただきたいと思います。

と、その前に!! 今月の23日と24日には、『EXILE THE SECOND LIVE TOUR 2017-2018 “ROUTE 6・6”』が幕張メッセにてファイナルを迎えます。昨年の10月からスタ

ートしたツアーですが、約7カ月、全国各地を回って、SECONDメンバーそれぞれの今や未来につながる「ROUTE」を表現させていただきました。終わってしまう寂しさはありますが、このツアーの集大成をぜひ観にきていただきたいです。24日には、ライブビューイングで、映画館でもファイナルを体感できますので、お時間ありましたら一緒に、この旅の終着点の景色を見れたらうれしく思います。

2016年から本格始動を開始した、EXILE THE SECONDは、全員がEXILEのメンバーでもあります。だからこそ今年のEXILE再始動を目指して『for EXILE』の気持ちを軸にそれぞれのメンバーが、自分にできる事や得意なことをプロジェクトにしたり、作品にしたりして表現して来ましたが、それが今回のツアーで、EXILE THE SECONDの形として『一つにできた』とメンバーみんなで感じています。

歌を歌うこと、DANCEを踊ること、エンターテインメントを創り上げることで、表現できた僕らの『for EXILE』は、『from EXILE』として今後さらに進化させて、この先もみんなで突き進んでいきたいと思っています。

まずはしっかりと、ライブを踊り切ったら、“ROUTE 6・6”にレモンサワーで乾杯したいと思います(笑)。



19歳よりダンスを始め、EXILE PROFESSIONAL GYMにてインストラクターを務める。2007年に、二代目 J Soul Brothersのメンバーに抜擢され、2009年2月25日に、アルバム『J Soul Brothers』でメジャーデビューを果たす。そして、同年3月1日にEXILE新メンバーとして加入し、2011年には、THE SECOND from EXILEとしても活動を始める。また、個人活動として2011年に月刊EXILEにて、自身が所長を務める『EXILEパフォーマンス研究所』の連載を開始する。2013年、眠り of the year 2013「ベストネムリスト」の受賞を果たす。2014年4月、淑徳大学人文学部表現学科の客員教授に就任する。そして、2015年4月にEXILE USAが活動を行っているDANCE EARTH PARTYの正式メンバーに選ばれる。そのほか、役者としてドラマや舞台に出演するなど、さまざまな活動を展開し、エンターテインメントの可能性を広げている。

JAPAN MOVE UP WEST PRESENT'S

MOVE UP MOVIE

powered by



人生が「アがる」作品を、あなたに。

ミュージカル映画特集!!

夏到来! イベント盛りだくさんでワクワクしてしまうこの季節。

歌って踊って気分高まるミュージカル映画で、さらにワクワク盛り上がってみませんか?

世界を席卷したヒット作から、過去の伝説的な名作まで揃えた、鉄板映画をご紹介します!



Title
グレイテスト・ショーマン

Maker
20世紀フォックス・ホーム・エンターテインメント・ジャパン

Comment from TSUTAYA

『音楽の力を再確認する傑作』

おすすめは「パスポート」。別れを知って、一步を踏み出し始めるような一曲。センチメンタルになりながらもそれを糧に明日へ向かう。ノスタルジーになりながらも前向きな気持ちになれる春先にぴったりな青春曲。

©2018 Twentieth Century Fox Home Entertainment LLC. All Rights Reserved.



Title
ラ・ラ・ランド

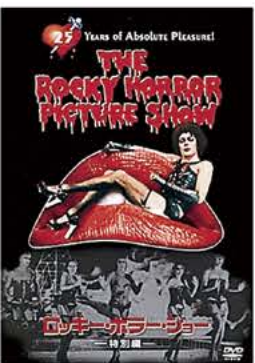
Maker
ボニーキャニオン

Comment from TSUTAYA

『観るもの全てが恋に落ちる』

世界の映画賞を席卷し、第89回アカデミー賞®では最多6部門受賞! 女優の卵とジャズピアニストの恋のてん末を、冒頭のハイウェイを筆頭に華麗な音楽とダンスで表現する極上のミュージカル・エンターテインメント!

©2017 Summit Entertainment, LLC. All Rights Reserved.



Title
ロッキー・ホラー・ショー 特別編

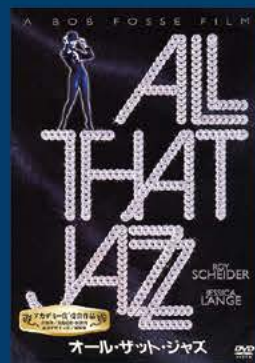
Maker
20世紀フォックス・ホーム・エンターテインメント・ジャパン

Comment from TSUTAYA

『伝説のティム・カリーの怪演技』

奇抜でユニークな伝説のロック・ミュージカル。何と言ってもティム・カリー演じるフランク・フルター博士のインパクト。この怪演で本作は熱狂的ファンを掴んだと言われています。これだけでも見る価値アリです。

©Twentieth Century Fox Home Entertainment, Inc. All Rights Reserved.



Title
オール・ザット・ジャズ

Maker
20世紀フォックス・ホーム・エンターテインメント・ジャパン

Comment from TSUTAYA

『ブロードウェイを赤裸々に描く』

ブロードウェイの振付師で演出家のボブ・フォッシー監督の自伝的作品でショー・ビジネス界の裏側を一人の男の通じて赤裸々に描く。病に伏しながらも幻想の世界でショーを幕落として描くなど異色のミュージカル!

©Twentieth Century Fox Home Entertainment, Inc. All Rights Reserved.



Title
ヘアスプレー

Maker
KADOKAWA

Comment from TSUTAYA

『幸福感と爽快感を得られます』

60年台を舞台に外見を気にしないビッグサイズでおしゃれとダンスに夢中な女子高生ヒロイン、トレーシーが活躍するコメディ。ただのミュージカル映画に留まらない思わず踊りだしたくなるハッピーな作品です。

TM & © MMV II New Line Productions, Inc.
© MMV III New Line Home Entertainment, Inc. All Rights Reserved.



Title
ピッチ・パーフェクト

Maker
カルチュア・パブリッシャーズ

Comment from TSUTAYA

『圧巻のアカペラ・パフォーマンス!』

全米で口コミから火がつき、大ヒットとなったミュージカルコメディ。渋谷に入った大学でアカペラ部に入ったヒロインが、ひとクセもふたクセあるメンバー達と衝突を繰り返しながらも絆を結び成長していく姿を描く話題作!

© 2012 UNIVERSAL STUDIOS All Rights Reserved.



Title
DESTINY 鎌倉ものがたり

Maker バップ

Comment from TSUTAYA

『見終わった後の余韻が心地よい』

西岸良平による人気漫画「鎌倉ものがたり」を実写映画化。人間だけでなく幽霊や魔物も住むという設定の鎌倉を舞台に、心霊捜査にも詳しいミステリー作家が新婚の愛妻と一緒に、怪事件を解決していくさまを描く。

© 2017「DESTINY 鎌倉ものがたり」製作委員会



54

JAPAN MOVE UP WEST



選手のここで見える事の出来ない素顔を知って地元Jリーグチームを応援しよう!

素顔の一森選手に
11問11答でお答えいただきました!!

01.チーム内でのニックネームは?

じゅんです!!!!

02.周りからどんな人って言われる?

おもんない!!

みんな僕の笑いについてきてないだけです(笑)

03.子どもの頃の夢は?

小1から変わらずプロサッカー選手

野球、水泳、体操は1日で辞めました(笑)

04.最近の癒しは?

1歳の息子

息子だけは僕の笑いについてきてくれます。(笑)

05.よく聴く音楽は?

"Mr.Children"を練習前と試合前に聴きます。

♪終わりになき旅が1番好きです!

前向きな気持ちになれる

06.チームメイトの中で1日入れ替わるなら誰になって何をしたい?

#14上田康太選手になって

スループス 出します!!

カッコ良くチャンスを演出したいです。

07.オフの日の過ごし方は?

絶対やるのはトレーニング!

ボールは使わずポディワーク中心です。

あとは、時間があれば家族でお出かけかな。

08.思わずグッとくる女性の仕草は?

何も言ってないのに、しようとした事を

先にしてくれた時

例えば、醤油をとろうとしたら醤油取ってくれた時みたいな(笑)

09.仲の良いチームメイトは?

強いて言うなら

#1 椎名一馬選手

10.ついやってしまうクセは?

気付いたらサッカーの事を

考えていて人の話が

聞こえてない(笑)

子どもの頃から、寝ているときも

サッカーをしているらしく

寝言で叫んでいるらしいです!

母親からの情報です(笑)

11.頑張った自分へのご褒美は?

体に良いものを買う。

寿司を食べる!

vol.2

一森純

一森純 -いちもりじゅん- 1991年7月2日 182cm/77kg 大阪府出身

ファジアーノ岡山の守護神として活躍する一森選手。常にサッカーの事を考えている熱い部分を見せつつ、関西出身らしいノリの良さで盛り上げてくれ、笑いが絶えないインタビューとなった。#10の大竹洋平選手は、実はすごく気になった性格や、#6喜山康平選手と#14上田康太選手は、普段から仲が良すぎて、この前の連休も一緒に過ごしていた。気になる方は、喜山選手のインスタを見て下さい!とチームメイトの秘密を教えてくれた。



22GK

シンガーソングライター

mihoro*

みほろ

玉川(以下、玉):mihoroちゃんはライブ中にどんなことを考えながらステージに立っていますか?

mihoro(以下、m):これといって特には考えてないです(笑)でも歌っている時は必ずお客さんみんなの顔を見るようにしてます。あと、歌う時は基本いつも裸足です。元々は靴を履いていたんですけど、高めのヒールを履いて歌っていた時に、ヒールが欠けてしまったことがあって、“私は靴は向いてないんだな”って思って履かなくなりました(笑)

玉:普段とステージ上でのギャップが凄いですよね!

m:ステージに立っている時は、かわいいとかじゃなくて、かっこいいって思われたい。ライブが終わった後なんか“かっこよかった”って言われることがやっぱり嬉しい。それとこの間、ライブ終了後の物販の時にお客さんと話していたら“mihoroちゃんって笑うんだね”って言われて、私ステージでどれだけ笑ってないんだよって思いました(笑)

玉:ステージ裏とかだったらよく笑ってるよね!そのステージとのギャップも本当にすごいかっこいいと思う!

m:普段は笑ってますよ。笑ってますっておかしいですよ(笑)なんか常に笑ってる人みたい(笑)

玉:mihoroちゃんはいま高校3年生ですね。今、そして将来に向けての目標はありますか?

m:目標というよりか、今しか書けない曲を残していきたい。今自分が高校生だからこそ、同世代に共感してもらえる音楽を書きたい。もし歌詞が入ってこなくてもメロディーがいいとか、逆にこの歌詞がいいかと思っていただけたらなにか伝わってよかったなって思えるし、またみんなが2回目、3回目と自分のライブに遊びに来てくれるようになったら本当に嬉しい。自分の言葉や音がちゃんとみんなに伝わったんだなって思えるから。今は岡山県中心で活動していますが、県外の活動もだんだん増えてきたのでもっと頑張っていきたいです。

玉:なんと6月30日(土)、もう今月末ですね!初のワンマンライブを開催するということですが是非、意気込みなんかをお聞かせください。

m:ワンマンに遊びに来てくださる人たちにとって、なにか特別なステージにしたい。その日その時にしか出来ないこと。ワンマンするぞ!というよりはラフに。そして高校生最後の時や、20歳になる時にに向けて、もっと成長しておくための第一歩だと思っています。まだまだスタートライン。これから、やるぜ!といった気持ちです。みなさん楽しみにして来ていただけたら嬉しいです。

玉:最後にmihoroちゃんにとって音楽とは?

m:自分にとってかかせないものですね。みんな絶対1日1回はどこかでなにかしらの音楽を聴いていると思うんです。人間が生きていく中でかかせないもの、それが音楽。音楽は私たちの生活の一部というか。私の作る音楽もそうやってこれから聴いてもらえる人たちの生活の一部になっていけたらいいなって思います。

ステージの上では、
かっこよくいたい。



mihoro* みほろ (写真左)
シンガーソングライター
高校3年生 17歳
岡山を中心に東京や関西などで活動中。

Interviewer 玉川 洋輔 (写真右)
シンガーソングライター
facebook・Twitter・Instagram:
玉川洋輔で検索



世界でも活躍していきます。

兼本理玖 兼本鈴菜

プロスケーター
Riku Kanemoto

スケーター
Suzuna Kanemoto

Profile

兼本 理玖 Riku Kanemoto (写真右)
 プロスケーター
 2014年、全日本大会(東京都)にてプロ資格獲得
 プロ戦・イベントで活動中
 岡山県出身 1999年9月28日生

兼本 鈴菜 Suzuna Kanemoto (写真左)
 スケーター
 大会、撮影、イベントを中心に活躍中
 joy and sorrow3 Wパートに出演、次作のRestartに向けて撮影中
 岡山県出身 2001年3月30日生

――スケートボード(以下:スケボー)を始めたきっかけを教えてください。

兼本理玖(以下:理):3歳くらいからスノーボードを始めて、小学生くらいから夏でもできないかと思って家の近くの奈義町でスケボーのイベントを見たときに、かっこよく自分もやりたいと思うようになりました。元々何でも回るものが好きで、イベントでプロのスケボー見たときに“なんであんなに魔法みたいに回っているんだろう?”と、そこからもうハマりました。

兼本鈴菜(以下:鈴):兄がやっていたので私もやってみようかなという感じで(笑)ジャンプとかオーリーという技ができたりすると楽しくハマりました。

理:技も完成形がなくてどんどん追求して欲もできて練習してそのトリックができたときはその感覚が嬉しくてやめられなくなりました。

――そもそもスケボーはどんなカルチャーでしょうか。

理:2020年の東京五輪にも正式に決まったことからスポーツ色が強くなってきましたが、それまではやはり一般的には趣味というか個人で楽しむもの、ストリートカルチャーという感覚だったと思います。僕らの中では始めから競技スポーツというもので捉えていたので同じ感覚に世の中も変わってきたことはとても嬉しいです。

――プロになってから変化や違いはありますか。

理:やはり今までとは違い、名前の後にプロと肩書きがつくことで見ていただいている皆さんの目も変わり、プロ意識はつきます。一回一回そのタイミングで自身の力を発揮、成功できないといけけないのでそういうショーケースなどの魅せていく意識ができました。

――今まで挫折したことはありますか。

理:明確な理由はなかったのですが、高校1年生の時に本当にやめたいと思ったことがあります。家族の前でやめる宣言もしました。ただスケボーをやめたらただの人になってしまう、プロとしてスポンサーや仲間もたくさん持つことができた中で、もう自分だけの問題じゃないと考えも出てきて、再度本気でやり始めました。

鈴:高校1年生の頃に膝にスポーツができなくなってしまうほどの大怪我をしてしまいました。一人で入院していた時に“もうやめたほうがいいかな”とすごく悩みました。同時期に女性スケーターのDVD出演オファーを村井祐里さんという方からもいただいていたので、今やめたら村井さんに申し訳ないと思い、頑張って治して、今は完全復活です。その出演のきっかけもあり、“周りの人のために続けたい!”という意識も芽生えることができました。またDVDの撮影で全国に友人ができ、色々な方とも関わることができたので『人の印象に残る滑り』をしないとけないなと考えが変わりました。

――世界と日本の違いはありますか。

理:技術は日本人の器用な部分があるし、粘り強く練習する方が多い印象なので世界と比べてもレベルは高いと思います。

――今後の夢や目標を教えてください。

理:ストリートイベントなど企画・完成もしたいですけど、1番はやはり海外リーグに挑戦、優勝。海外で活躍できるスケーターを目指します。

鈴:アメリカで経験を積んで活躍できるようになりたいです。あと、デモンストレーションなどで見ていただいた方が喜んでくれて印象に残る滑りができるようになることです。

お互い満足出来なければ
 良いものは生まれません。

B: 上昇するアイテムに『満足×満足』を選んだ理由は?

千種将也(以下、千):新しい会社名が(株)Gratification(グラティスファクション)と書いてグラティフィケーション(満足)とサティスファクション(満足)を掛け合わせて作った造語です。僕も満足、お客さんも満足してお互いが満足出来ないことには、良いものは生まれません。楽しめる環境を創造する決意を持って、お互いを上昇させる言葉を選びました。

BAZ-K(以下、B):1店舗目の“BEER BAR 11TheRock”をはじめたきっかけは?

千:元タスポーツパーで1年間バイトをしていて、その時にもっとお客さんと近い距離で一緒にスポーツ観戦をしながら会話ができるような場所を作りたいと思ったのがきっかけです。社会経験がないと、お客さんともコミュニケーションが取れないなと思ったので、5年間卸会社で会社員として精一杯働かせてもらいました。

B:独立するとき不安とかなかった?

千:卸会社に勤めていた時に、良い事も悪い事も経験して、挫折も味わいました。お店を出すことに勇気もいったし、不安もあったけど、夢のためにも不退転の決意でやろうと思いましたね。

B:なるほど。お店をBEER BARにしようと思った経緯は?

千:単純にビールが好きだったので、僕の好きなビールを中心に据える形でBEER BARにしました。スポーツ観戦、Rock鑑賞しながら飲むのはビールがなって。

B:2店舗目、3店舗目と続けてオープンにした経緯は?

千:1番は、タイミングですね。たまたまいい物件に出会って、僕たちとお客さんが近くで話せる環境でありたいという思いもあり、1店舗目はBEER BARで出したので、本格的にスポーツパーとして売り出していく意味で“ANGLE SPORTS BAR”という色んな角度で楽しめる店名にしました。それだけでは差別化できないので、新しく“シーシャ”(水タバコ)を導入しました。

B:同じような業種のお店が増えている中でどうやって差別化を図りたい?

千:年代ごとや、飲みたいシーンでお店を選んでもらえるように3店舗を出しました。3店舗目の“BAR Don't Be Shy”は、原点回帰ですね。ゆっくり会話をしながら飲めると言ってもらえるので、オープン当初のお客さんにも支持されているなと感じます。提供するお酒は蒸留酒、特にスコッチメインでやっています。

B:お酒って雰囲気大事だね。では、お店をしていて良かったと思うことは?

千:大人になって、同世代の色んなジャンルで頑張っている仲間と繋がれて、会話が出来て、次に繋がるものが生まれた時が良かったと思う時です。

B:なるほど。逆に苦労や大変なことはある?

千:3店舗あるという強みを生かしつつ、サービス面を強化する目的で社員教育をすることですかね。あとは、法人になったので経理とか色々大変になっていくのかなと思います。

photography:宗村 和磨 (NEMURA FILMS)

B:地元岡山を盛り上げて発信していくためにしたいことは?

千:若い子たちが、岡山で遊ぶ選択肢を増やしてあげたい。飲み屋さんが増えている中で、より楽しんでもらえるようにしたいと思いますね。楽しいことをどんどん発信して、岡山の街に飲みに出てくる人が増えていくようにたくさんの楽しい事を考えて発信していきたいです。

B:お祭りの時だけに人が溢れて盛り上がるのではなく、普段から人で溢れて盛り上がっているような岡山の街に僕もしたいと思います。今後の夢と目標ってある?

千:まずは、今やっている3店舗をしっかりと固めていくことですね。もし、出来るとなればシーシャカフェを出したいなと。こじんまりしたお店でお昼から営業出来るようなカフェを出すのが目標ですね。

B:同じようにこれから経営者を目指す人たちにメッセージを。

千:『出る杭は打たれ強い!』『自分を信じて突き進め!』ですかね。僕も失敗するかもと思ったり不安もあったけど、やりたいことや夢の為に自分や仲間を信じて進んできて、間違っていなかったと思えるので皆さんもそういう思いで信じる道を進んでほしいです。どれだけ挫かれても、負けずに頑張してほしいです。

B:ありがとうございました。これからの岡山と一緒に楽しく生きていきましょう!

株式会社Gratification 代表取締役

千種 将也

Chikusa Masaya

満足 満足



千種 将也 Chikusa Masaya (写真右)
 株式会社 Gratification 代表取締役
 岡山市出身 1988年12月2日生

Interviewer:BAZ-K(写真左)
 株式会社バズクリエイション代表取締役



BEER BAR 11TheRock
 場所:岡山市北区本町10-16幸武本町ビル3F
 営業時間:18:00-3:00 店休日:年中3休
 TEL:070-5051-1169



ANGLE SPORTS BAR
 場所:岡山市北区幸町3-10友沢ビル3F
 営業時間:19:00-5:00 店休日:年中3休
 TEL:080-4556-1185



BAR Don't Be Shy
 場所:岡山市北区磨屋町7-7江口磨屋町プラザ2F
 営業時間:20:00-2:00 店休日:日曜日・月曜日
 TEL:080-9355-0021

――アイテムに時計を選んだ理由を教えてください。

中島 聡(以下:中):この時計は、亡くなった父の形見で、いつも身につけているものです。試合や何か大事な時に、この時計を見て「俺はいつも頑張っているよ」と父を思い浮かべて、頑張っています。

――バスケットボールを始めたきっかけを教えてください。

中:バスケを始めたきっかけは、先に兄がバスケをやっている単純にそれを見てかっこいいなと思ってやり始めたのがきっかけです。小学生の頃は自分の住んでいる地域にミニバスがなかったので、家の外で電柱をゴール代わりにして遊んでいました。本格的に始めたのは中学の部活に入ったタイミングです。

――3x3を始めたきっかけは何だったんでしょうか?

中:現在も、5人制も並行してやっているのですが、3x3(スリーバイスリー)が3on3(スリーオンスリー)と呼ばれていた時代に、3on3のストリートボールリーグ「SOMECITY」という大会があって、その大会に当時契約していた大阪の5人制のプロチームのチームメイトに誘われて3on3をやったことが3人制を始めたきっかけですね。5年前に世界バスケットボール連盟のFIBAが3on3を“3x3”という名称に統一してルールを定めて正式種目にしました。それから、去年、東京五輪からオリンピック種目に正式採用されることが決まるところまで成長したんです。

――TRYHOOPを作ったきっかけを教えてください。

中:バスケをずっと続けてきて、プロチームに所属していた頃に学んだ、プロ選手が子供たちにバスケを教えているスクールでの子供たちの熱心さや、試合でたくさんのお客さんが来て会場が盛り上がっているというバスケの素晴らしさを、プロチームがない岡山に戻り何か還元できることはないかと思って、岡山にバスケ専用施設を作ってそこでスクールを始めました。そうしているうちに、3人制の3x3が正式種目になり、岡山で3人制のプロチームを持つてみたいかと声をかけていただき、プロチームを結成しました。プロチームがない県は他にもあるのですが、僕自身が岡山にいる時にバスケが上手くなったので、何か自分なりにできることはないか考え、恩返しのような感覚で岡山を選びました。

――スクール業を始められたのはなぜなのでしょう?

中:僕自身、中学校からバスケを始めて大学に入るまで、顧問の先生があまりバスケを知らなかったこともあり、きっちりとした指導を受けてこなかったんです。そんな中で、岡山大学に入った時に全国大会を経験している選手と練習をしたり、またプロチームに入った時に指導してくれたコーチの指導が素晴らしくスキルアップにつながったのですが、もし自分が大人になって受けた指導を小さい頃から受けていたら、もっとプロ時代に何か実績として残せたのではないかと感じました。そういった自分の悔しい思いをきっかけに、バスケをもっと頑張りたいという子供たちや、僕と同じような思いを子供たちがしないようなバスケを学べる場所があれば素晴らしいんじゃないかと思いスクールを始めました。

――3x3の選手として岡山をどんな風に盛り上げていきたいのでしょうか?

中:岡山では、イオンモール岡場で3x3のイベントや大会を開催しているのですが、そういっ

子供たちに、
夢を持ってもらえ
る場所を
提供したい。

TRYHOOP OKAYAMA .EXE 代表

中島 聡

Nakajima Satoru

たショッピングモールなどで開催することでたくさんの方に観てもらえたりするので、バスケの素晴らしさを身近に感じていただきやすいと思います。3x3はコートが半分ということもあって、スピーディーな展開が楽しめる特性のある競技だと思うので、バスケを知って欲しいのはもちろんですが、岡山の方にスポーツの素晴らしさが伝わって盛り上がってくれると嬉しいですね。

――TRYHOOP OKAYAMA .EXEはどんなチームなのでしょう?

中:国内でも、「高さ」が日本最高峰のチームだと思います。身長が平均2mのチームなので、高さを武器にしているチームです。

――TRYHOOPをどんな場所にしていきたいのでしょうか?

中:子供たちにプロ選手を身近に感じてもらえる場所だったり、自分がプロ選手になるという夢を持ってもらえる場所にもしたいです。また、バスケから離れてしまった人が気軽にまたバスケをはじめられる場所にしたいという思いも強いです。気軽にバスケができる場所が、まだまだ岡山には少ないと感じるので一つでも二つでもそういった場所が増えて欲しいという想いからレンタルコートもしています。

――今後の目標を教えてください。

中:岡山にBリーグ(5人制プロバスケット)のチームを作って、それがプロスポーツチームとして岡山に根付かせていくことが今の目標です。また、Bリーグと3x3プロリーグは開幕シーズンがかぶっていないので、岡山を一年中バスケが楽しめる街にしたいです。

Profile

中島 聡 Nakajima Satoru
 TRYHOOP OKAYAMA .EXE 代表
 岡山県在住 1984年9月18日生

photography: 宗村 和磨 (NEMURA FILMS)

JAPAN MOVE UP WESTの更なる活動の浸透と広がりを実現するために、
より具体的かつ大胆に様々なジャンルの“Rise!～上昇～”をバックアップ。自身の心にある熱い想い、夢などを聞く。
Rise!の先には必ず人間の生きる意味、生まれてきた意味が見えてくると確信する。

JAPAN MOVE UP WEST



01 interview

Rise!
JAPAN MOVE UP WEST **ATHLETE**

中島 聡

02 interview

Rise!
JAPAN MOVE UP WEST **NEKTER**

千種 将也

03 interview

Rise!
JAPAN MOVE UP WEST **STREET**

兼本 理玖/鈴菜

04 interview

Rise!
JAPAN MOVE UP WEST **ARTIST**

mihoro*

――EXILE PERFORMER BATTLE AUDITIONを受けたきっかけは？

山本彰吾(以下:山):もともとのきっかけは、母がオーディションを受けることを提案してくれました。当時高校三年生だったんですけど、地元(岡山)では一緒にダンスをしていた仲間たちとイベントを主催したりとか、ダンス講師としても仕事をさせていただけにいました。だけど、その環境がだんだんマンネリ化してきているなと感じたり、何か刺激が足りないなと思っていたところで母が「久しぶりに東京に行って刺激を受けに行ったらどう？」と提案してくれたのがきっかけでオーディションを受けに行きました。

――その当時から将来はダンスで仕事をしていきたいという思いはあった？

山:そうですね。オーディションを受ける前から何度かバックダンサーとしての仕事もさせていただいていたので、ダンスで食べて行くだらうというのはありましたね。小学生の頃から仕事をするならダンスが良いなという思いはありました。

――夢が叶ったということですね。オーディションを経てTHE RAMPAGE from EXILE TRIBE(以下:RAMPAGE)の正式メンバーに選ばれた時の気持ちは？

山:合宿の最終日にHIROさんから新グループの候補生として活動して欲しいと言っていた時は、まだ現実味がなくてどんな感じなんだろうという探り探りの状況だったんですけど、武者修行をさせていただいたり、先輩方のパフォーマンスを見ていくにあたって、自分の夢がざっくりとしたものから具体的なものになりました。そこから武者修行に対する気持ちもより強くなって、夢を追いかけるようになりました。

――実際にプロとして活躍している先輩方を見た時の率直な気持ちは？

山:もちろんクラブなどで踊って観客を湧かせたりするのも素晴らしいですし、それがダンスカルチャーの始まりではあるんですけど、やっぱりEXILEさんのように“日本を元気に”されている姿というのは僕の中ですごく大きかったですね。EXILEさんって本当にただのパフォーマンスグループではなくて“日本を元気にする”団体のような気がしていて、ダンスだけではなく、歌だけでもないグループだなと思うので、僕個人の意見なんですけどそういった方たちの背中が一番かっこいいんじゃないかなと思うんです。その中の一員になれたというのはやっぱりプレッシャーもありましたが嬉しかったですね。

――RAMPAGEの中での役割は？

山:RAMPAGEは16人メンバーがいるので、その中でみんなとコミュニケーションを取らないといけ

ない場面が多いんですけど、僕がグループの中では歳が真ん中ということもあって、色々なメンバーの意見を聞いて、より良いものを創り出せるようなそんな役割になるために、結構リハーサルなどでも積極的に発言したり、進めさせてもらったりしています。もともと性格上、あやふやになってしまうことが嫌いなので物事ははっきり決めなければいけない時には前に出るようにしています。

――16人の中でのパフォーマンスの魅せ方は？

山:僕は比較的ストリートダンサーに寄っていて、自分の縛られたスタイルがないと思っているのでそこは僕の強みだと思います。

――RAMPAGEで振り付けを担当されている楽曲もあると思うのですが振り付けを考えるにあたって意識していることや考え方などは？

山:RAMPAGEの形としては、楽曲のインスピレーションを受けたリーダーのLIKIYAさんが振り付けを考えるんですけど、例えば、カップリング曲で今までのRAMPAGEとは違う一面を魅せたい楽曲などは僕が振り付けを担当させていただいています。振り付けを考えるにあたってまず考えるのは、メンバーのみんなが踊っている画を思い浮かべることから始めています。あとは曲調にもよるんですけど、僕は新曲を聴きながら街を散歩するんですけど、多分二時間くらいひたすら歩いているんですけど、ずっと新曲をリピートして聴きながら街で色々なものを見た時に、自分がその曲をどう思うのかを感じながら振り付けをしています。僕は発信する立場にいて、みなさんに届ける立場としては、聴いてくださる、パフォーマンスを見てくださるみなさんの気持ちも分かっているといけないなと思っているのでそういうことはすごく意識するようにしています。

――現在47都道府県を回る初の単独ツアーを行われていますが、地元岡山での凱旋ライブについて思うことは？

山:やっぱり地元でライブができるということはすごく嬉しいですね。地元に戻れるというのも、もちろんなんですけど、東京に上京して何年かすると「あの今何してるんだろう？」とか僕の今というのが分からなくなってしまうことがあると思うんです。でも僕はありがたいことに、地元でライブをすることが出来て、それを体現できる場所を設けていただけているのですごく感謝しています。今回のライブで初めて僕を見る方もいらっしゃると思いますし、僕がいるRAMPAGEというグループがすごいグループということもしっかりと伝えられる嬉しさはすごく大きいですね。両親の存在も大きくて、母はダンスの経験はないんですけど僕が小さい頃から練習の時に意見をくれたりしていたので、未だに両親が見に来てくれるライブは緊張しますし、昔から一番僕のダンスを見てくれていたのは両親なのでライブが終わった後はどうだった？と聞いてしまいますね(笑)

EXILEさんのように
日本を元気に“
”
僕の中で
すごく大き
かったですね。



――岡山の好きなところは？

山：岡山って、人がよく街を歩いているなという印象がありますね。東京に来て思ったことなんですけど、岡山も人が多いなと感じたんです。人数感の違いはもちろんあるんですけどみんなが活発なイメージがあってそこはすごく岡山の良いところだし、大きい商業施設が出来ても友達や家族みんなで行くイメージがあってそういう温かいところがあるなと思います。あとはお祭りもすごく好きで、土曜夜市とかの小さいお祭りも好きですし、岡山はうらじゃがあるので盛り上がりますよね。僕も小さい時に、当時ミュージカルをやっていたメンバーとうらじゃに出て踊ったことがあってその時に優勝したんですけどそれがすごく記憶に残っていて、うらじゃは岡山特有のお祭りでもありますし、お祭りと踊りが一緒になっているのでダンスを知らない人も、地元の踊りに触れ合えるお祭りなのでそれがすごく良い環境だなと思いますね。

――岡場で好きな食べ物(お店)は？

山：僕が岡山に帰って来たら必ず行くお店が、元バイト先の焼き鳥屋さんとラーメン屋さんです。地元倉敷の名物としては、ぶっかけうどんが大好きで帰って来たら絶対食べています。好きすぎてネットで取り寄せて東京でもよく食べていますし、メンバーもよく食べています(笑) 後は、いつも岡山でダンスを練習していた時に行っていたラーメン屋さんですね。夏は冷やし中華、夏以外は焼肉丼がめちゃくちゃ美味しいのでよく食べていました。

――RAMPAGEになって、地元の友達や家族、周りの反応は？

山：本当に温かいものがありますね。地元の友達も常に僕たちの活動をSNSやテレビを通して見てくれて、意見やメッセージをくれたりするのですごくありがたいですし嬉しいです。僕に甥っ子がいるんですけど、家族がRAMPAGEのMVを見ながら甥っ子が踊っている映像を送ってきてくれたりするので、家族や友達など、繋がっている人たちにしかもらえない元気をもらっているなと感じますね。

――最後にファンの皆さんにメッセージをお願いします。

山：18歳まで生まれ育った岡山は、色々な場所にも行きましたし、色々な方と出会って、僕という人間を創ってくれた岡山が、もっともっと僕たちの力で活気付いて元気な街になるように、僕たちRAMPAGEが先陣を切って岡山、そして“日本を元気に”していけるグループになるべく、これからも頑張りますので応援のほどよろしくお願ひ致します！



SPECIAL FRONT INTERVIEW

山本彰吾

(THE RAMPAGE from EXILE TRIBE)

2013年 EXILE PERFORMER BATTLE AUDITION、新グループ候補生、

そして全国武者修行を経て夢を叶えたTHE RAMPAGE from EXILE TRIBEの山本彰吾。本誌が5年の年月を経てついにインタビューが実現。

THE RAMPAGE from EXILE TRIBEの中から見た自身の心情、そして地元岡山への想いをインタビュー。

FREE JMUW vol.32
June, 2018

SPECIAL FRONT INTERVIEW

山本 彰吾

(THE RAMPAGE from EXILE TRIBE)

JAPAN MOVE UP WEST

Rise! INTERVIEW-ATHLETE-

中島 聡

Rise! INTERVIEW-STREET-

兼本 理玖/鈴菜

Rise! INTERVIEW-NEXTER-

千種 将也

Rise! INTERVIEW-ARTIST-

mihoro*

FAGIANO OKAYAMA

一森 純

NEXO